

昭和55年 ～ 59年

1980～1984



昭和56年、村のシンボルとしてモミジ(木)とリンドウ(花)を制定

にぎやかに学習発表会

石墨小懐かしい前任の先生招待

雪に覆われた上浮穴郡面河村柚野の小さな学校、石墨小学校で、二月三日、前任の先生らを招いての学習発表会が地区ぐるみで和やかに行われ、普段はひっそりとした学校は、明るい笑い拍手がはじけた。

学習発表会は毎年二月初めに、予餞会を兼ねて行われ、学校、地域挙げての楽しい年中行事の一つとなっている。今年は、子供たちが「先生、私たちの発表会をぜひ見に来て」と、昨年まで同校に勤務していた千田尾睦枝教諭(三)と平松義樹教諭(七)を招待。二人は二十五センチの積雪を分けて駆けつけ、再会を喜び合った。

(昭和55年2月8日)



チームワークよく器楽合奏をする14人の全校児童

廃校がよみがえった!

地域ぐるみで運動会

人影の絶えて久しかったお山の廃校に七カ月ぶりに歓声がよみがえった。他校へ転校して行った子供たちが、卒業生たちが集まった。懐かしい先生たちも顔を見せた。地区の人々とともに秋晴れの一日を走り、踊り、ゲームに興じて運動会を楽しんだ。

上浮穴郡面河村石墨小学校が、校区の過疎化、児童数らの減少から百四年の校史を閉じたのは今年三月二十四日。昨年まで運動会は学校、公民館合同で校区ぐるみで行われ、校区の年間最大の行事だった。ところが、同校の閉校に伴って地域の「核」のつが消え、今年の運動会は開催が危ぶまれ、地域の人々を寂しがらせていた。

このため、公民館や地区民、元の学校教職員らは「学校はなくなっても、運動会は絶やさず、石墨小をしのぼう」と働きかけ、十月十八日、実現にこぎつけた。

閉校以来人影も絶え、ひっそりとしていた校庭には万国旗が張り巡らされ、「石墨小学校」のネーム入りのテント本部席も設営された。卒業生たち、他校へ転校して行った子供たち、地区民、さらに松山から元の教職員らも姿を見せ、総勢約百人が参加、各種の競技、ゲームなどに興じた。午後からは学校の元集會室で折り詰めを並べての地区懇親会に移り、この日はやはりグラウンドに、校舎に、和やかな歓声が沸き、秋晴れの空にはじけた。

(昭和56年10月21日)



グラウンドにこれだけの人数が展開するのは久しぶり。卒業生も先生も地区民も一緒に楽しむ「風船割り」

帰省客ら1000人どっと

面河・ふるさとまつり

上浮穴郡面河村で十二月十三日、「第六回ふるさとまつり」が行われ、大勢の村民や帰省者でにぎわった。村民の心を一つにして連帯感を高め、豊かなコミュニティづくりを進めることが狙い。会場の村民センターや役場前駐車場は朝から千人近い人出。過疎の村はこの日ばかりは華やいだ。

村民センターには手芸・工芸品、写真、生け花、小中学生の作品など力作がズラリ。開会式では結婚五十年以上の夫婦三十組が表彰された。芸能大会では同村出身の演歌歌手宇都宮多美香さんのショーも開かれ、午後のノド自慢大会も満員。役場前駐車場の農林産物展示即売では、新鮮さと安さも手伝ってまたたく間に売り切れた。
(昭和58年11月14日)



年に一度のにぎわいをみせた面河村のふるさとまつり

「面河村」が50歳に

立派な村づくりを決意

上浮穴郡面河村が、村名を柚川村から現在の面河村と改称して今年で満五十年。一月十二日、同村淡草の村民センターで改称五十周年記念式が開かれ、村内外から出席した百七十人が同村半世紀の歴史を祝った。

同村は、明治二十三年の市町村制施行で柚野と大味川が合併、柚川村と呼ばれていた。昭和八年、面河溪が文部省から国の名勝に指定されたのを契機に同九年、村名を改称した。面河村になってからの人口は二十四年の五千二十八人がピーク。以後、経済の高度成長や面河ダムによる水没などの影響で人口流出・過疎化が進んだ。現在では五百十世帯、千四百人を数えるのみ。

午前十時半から開かれた式には、中川鬼子太郎村長ら村関係者のほか県松山地方局長、県選出代議士(代理)、小田慶孝県議、郡内町村長が出席。中川村長が式辞で「村の人口は毎年確実に五十人から七十人は減っている。しかし、このような時にこそ村に根を下ろして困難を克服しなければならぬ。この日を発展のステップとして、みなさんとともに立派な村づくりに励みたい」と決意を述べた。
(昭和59年1月13日)



村名改称50周年式で式辞を述べる
中川鬼子太郎面河村長

帰省組も楽しい1日

上浮穴郡面河村の「第七回ふるさとまつり」が十一日、村民センターを主会場に開かれ、芸能大会、農産物即売、各種展示でにぎわった。

地域の産業活性化を狙いに、村などが主催で五十三年から実施している。まつりは、村民のほか、松山とその周辺に住む村出身者の集まり「面河村同郷会」（青木末広会長、二百七十戸）にも案内を出し、年に二度の親ぼくの場ともなる。

この日のために村は松山から貸し切りバスを運行させ、マイカーなどでやってきた人も合わせる人出は約八百人。会場のあちこちで「お久しぶり」の言葉が飛び交っていた。

（昭和59年11月12日）



獅子舞も繰り出した面河村ふるさとまつり

昔懐かし炭焼き復活

「省エネ時代、炭を焼いて自分たちの使う燃料ぐらい作るう」と、上浮穴郡面河村の峰地区の人たちが、このほど共同で同村でもほとんど廃れていた炭焼き窯を造り、今冬から自分たちで炭焼きを始める。

山深い同地区は十二戸と数は少ないがまとまりは抜群。このうち、菅万徳さんや渡辺友近さんらを発起人にして炭焼き窯を造ろうとの声があがった。

昔、炭を焼いていた人や窯造りをした経験者が指導。窯の枠を木で組み、土を盛り立てていく。四日かかりで、幅三メートル、高さ約一・五メートル、奥行き約三メートルの小型ながら立派な窯の形ができた。空たきをして土を乾燥させると完成する。一回の炭焼きで、二軒の家で使うほぼ一年分の約十五俵の炭が採れる。

（昭和57年12月1日）



共同で炭焼き窯を造る菅さんら

秋の味覚 もう出番

実が大きく、味もよいとして評判の新面河名産「大石プラム」が、面河村で収穫期を迎え、八月十四日に、松山の市場へ今年初出荷される。

農業の振興を目指して村が、五年前に福島県の名高い大石プラムの苗木を導入。五十四年の市場初出荷以来、三年目で本格的出荷にこぎつけた。

木がまだ若いため、一本で三―五百個の実しかならないが、順調な生育で五―六センチと大きいうえ、柔らかく甘い果肉が自慢。県下では、この種のプラムは同村以外ではほとんどなく、貴重な存在。

（昭和56年8月14日）



順調に育ち、甘く大きな実をつけた大石プラム（面河村笠方で）

面河をキジの古里に

たった一人飼育に執念

十二年前、過疎の歯止め策として導入された上浮穴郡面河村笠方地区のキジ飼育だが、今ではUターン青年一人が細々とコウライキジの飼育に取り組んでいるだけになった。この青年は地区民たちの夢だった「キジの里」づくりを執念を燃やしており、村民たちも青年の地道な努力に拍手を送っている。

四十六年、就任早々の中川鬼子太郎村長が新しい産業をと、同地区でのキジ飼育を奨励した。肉と剝製で観光客に面河独自の味と土産品を提供し、住民の所得向上を図ることが狙いだった。副業として女性や子供、老人にも比較的楽にできる魅力もあった。

村ではキジ飼育の先進地、静岡県伊豆地方や岡山県を視察、施設作りの資材も助成した。十戸の農家が「面河村雉飼育組合」を結成、剝製作りの技術研修も行った。十戸のうち九戸が日本キジ、二戸がコウライキジの飼育を始めた。

しかし、ひなから親鳥になる成長率が低かったためか、採算ベースに乗らず脱落する農家が出始めた。三年後の四十九年には八戸に減った。五十年以降も三戸減り二戸減りして、五十五年ころには三戸を残すだけとなった。組合も自然消滅。そして現在、続けているのはコウライキジを飼育している菅益雄さん(二)と同村笠方妙(二)だけとなった。

菅さんは松山で調理師として働いていたが、五十四年古里面河へUターン。父親の重信さんがキジ組合設立当初からコウライキジ飼育にたずさわっていたため、それを手伝うようになった。その父親も二年後に死亡。以後二人でキジ飼育に取り組んでいる。

菅さんは現在約千六百羽を飼育。すべてコウライキジだ。コウライキジは日本キジに比べ繁殖率が良く、肉も多くとれる。施設は種鳥放飼場、ふ化場、育雛小屋、幼鳥放飼場など。四アールの種鳥放飼場には雌百五十羽、雄五十羽を放し、産卵は三月末から始まる。七、八月まで採卵、ふ化、育雛の作業が続く。

ふ化率は約六割。ひなになれば四十日間保温し、六十日びんで約十五アールの放飼場へ出す。放飼場は日当たりが良く、水はけを良くするためのゆるい傾斜があることが必要だという。山間地のため、タヌキ、キツネの襲撃があるが、

ネットで囲いを厳重にしている。悩みも多い。長雨、冷夏、台風、雪などで年ごとの出荷に増減がある。さらには体験者や参考文献が少ないため手探りでやらねばならない。放し飼いの養鶏を参考にするなどしてきた。また大量注文があつても一人の力では間に合わないこともある。

今後はコストを安くしていくかに販売先を開拓するかが課題。菅さんは「生産者がほかにいなくなったのは、無精卵の多発、成育途中の事故、施設の不備などが原因だと思う。これからはほぼ乗り越えられるめどが付いた。将来の目標は四千羽。私の父やその仲間が考えていた、面河をキジの古里に」という夢をもう一度追いかけてみたい」と話している。

(昭和59年1月4日)



放飼場で元気に動き回るキジ

診療所完成入院設備

上浮穴郡面河村診療所がこのほど完成、四月十三日午前十時から落成式が行なわれる。

現診療所老朽化に伴い、葺草の旧役場跡に約九千四百五十万円の予算で新築していたもので、鉄骨ブロック二階建て（延べ六百四十平方メートル）、現在の約二倍の広さ。入院設備（二階部分十ベッド）が新しくできたのが特色。

中川鬼子太郎村長は「入院設備もでき、大きく新しく安心してかかれる受け皿ができた。住民サービスアップに努めたい」と話している。

（昭和56年4月11日）



完成した面河村診療所

行楽客スムーズ誘導

面河溪入り口 臨時信号機お目見え

秋の行楽シーズンに入り、上浮穴郡面河村交通安全推進協議会（会長・中川鬼子太郎村長）はこのほど、紅葉の名所面河溪入り口に臨時信号機を設置し、車の混雑緩和を図っている。

車が増えるこのシーズン、昨年までは上浮穴郡交通安全協会面河支部（高岡義明支部長）などから人が出て交通整理をしていたが、人手だけでは混雑をさばくのに限界があった。信号機を取り付ければ車の流れがよりスムーズになる、ということから今年初めて導入した。

信号機を設置しているのは、関門トンネル前から通天橋上までの約三百メートルの区間。青四十秒、赤は二分四十秒で、混雑がひどいときには、手動式に切り替えて臨機応変に対処できる。

十月二十三日の日曜日に、交通安全協会支部員らが出て初の「試運転」を行ったが、効果は上々。信号機は十二月十三日まで、日曜・祭日の午前八時半から午後五時まで作動させる。

（昭和58年10月25日）



面河溪関門トンネル手前に設置された臨時信号機

行ってみよう夏休み 面河ダム

淡水魚釣りのメッカ

廃校を利用した民宿も

面河ダム(二十八年完成)は、知る人ぞ知る淡水魚釣りのメッカ。とくにブラックバス対象のルアー(ぎじえ)釣り客にはかつこうの場所。バスばかりでなく「¹⁾近いコイや六十²⁾級のマス、信じられないほど大きいアメノウオもかかるというのだからこたえられない。

四年前の夏から、廃校となった小学校舎を改造し、民宿を始めた「堂ヶ森」の経営者・松本久央さん(五)の話では、釣り客ばかりでなく、夏場は大学生の合宿、家族連れなどの小グループの宿泊客が多い。また、魚釣りに飽きたら、早朝のカブトムシ、クワガタ取りが面白いという。

(昭和57年7月19日)



学校跡を利用した民宿「堂ヶ森」。校庭だった前庭ではテニスも楽しめる

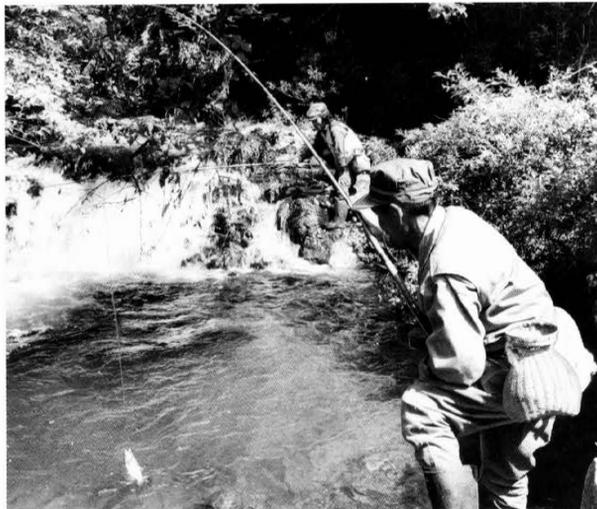
初夏にひろう アメノウオ釣り

深山の谷川でそつと糸

アメノウオ釣りはこれからが最盛期。上浮穴那面河村で、雪の残る二月一日に解禁となり、腹をすかしたアメノウオがよく釣れた。夏に向かつて釣果は落ちるが魚の味はよくなり、釣り人の腕のみせどころとなる。

同村笠方の高岡友二さん(七三)は、この道六十年以上というアメノウオ釣りの名人だ。交通の便が悪かったころは、新鮮なアメノウオが貴重なタンパク源とあつて、家族の食卓をかけて釣った。時は移つて今は楽しみ。人影を見ただけで岩陰に潜んでしまうアメノウオ釣りの奥義は「釣り人が自然の岩になりきること」だそうだ。

(昭和58年5月23日)



「これからがわしの出番」とアメノウオ釣りを楽しむ高岡さん(手前)

紅葉本番 名所は車ラッシュ

面河溪は、昼前ごろからマイカーとバスで込み始め、あまりのラッシュに面河溪行きをあきらめ、石鎚スカイラインに「進路変更」する車も出た。面河溪谷内の道路は駐車した車でいっぱい。行楽客は車の列をぬいながら紅葉散策。河原では、家族連れ、団体客らが弁当を広げたり、写真を撮りあつたりし、紅葉の溪谷は今秋一番のにぎわいとなった。

石鎚スカイラインの景観も見事。山々は紅葉やブナ、ツタなどの紅や黄で錦のよう。スカイラインには千五百台を超える車が上つて晩秋の山の美を楽しんだ。

(昭和58年11月4日)



紅葉をめながら弁当を広げる家族連れ(面河溪で)

観光150万人愛媛の昭和史 面河溪売り出し

日本八景選びきりかけ

面河溪の歴史は古い。明治後期から、溪谷の美しさを見るために、面河に入った人が何人も記録に残されている。俳人の森田雷死久、画家の佐賀徹也など。大正時代から昭和にかけては、児童文学者の巖谷小波、歌人の吉井勇、文部大臣だった尾崎行雄の名も見える。有名人が多いからといって、面河を訪れる人の数も多かったのかというと、そうではない。

今日、面河へ行くのは「行楽」あるいは「観光」であろう。当時はこれを「探勝」と呼んでいた。山越え谷越えの徒歩の旅は、脚力次第のものだった。おまけに時間と金がいふんかかった。昭和初期でも、松山からフルに自動車を使つてまる一日を要し、一般市民にはまるで関係のない「仙遊境」だったのだ。

面河が今日の形に向かつて進み始めたのは、昭和二年のことである。それも、国鉄松山駅開業がきっかけだった。

国鉄松山線の開通式のため、鉄道省から大臣代理として種田虎雄運輸局長が参列した。種田局長は徳島く池田く高知く須崎く佐川という変則コースで、土佐街道から松山入りした。このコースは予想外に素晴らしく、宿舍の「ふなや別館」を訪れた地元紙記者に対し詳しく説明したのだ。

「吉野川の沿道とか、祖谷川、仁淀川などの溪流美とか……久万といいましたかね。そこから下

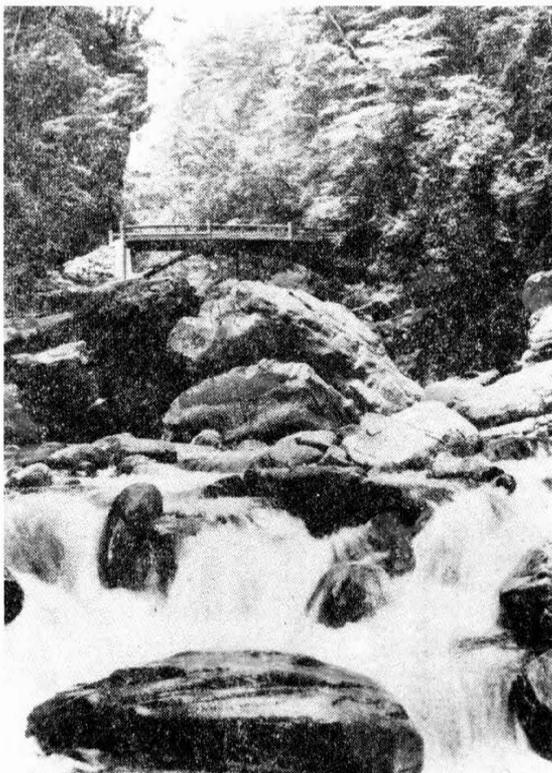
る三坂峠より見る瀬戸内海の大観美を見ると、全くこういう絶勝の地が今に置き、あまり社会に知られんでいる事を、むしろ不思議に感じている。これというの、交通が不便による結果が、社会に紹介を許さなかつたのではあろうが、社会にこれだけの絶勝の地を紹介しなかつたことは、当地方の人々にもその罪の一部はあると思う。……(中略)……天恵の自然は人間が利用して、その光を格段に発し、また多くの人が、その風光美を賞さなくては何の役にも立たない。ゆえに僕は当地方の人々が、これを広く天下に紹介すると同時に、また産業の開発に任ずることを切望してやまぬ次第である」(昭和二年四月四日付、愛媛新報)。

これだけなら問題はなかつた。ところが、種田局長がもうひとつ口をすべらしてしまった。当時鉄道省では日本三景を指定し、鉄道利用に合わせて売り出していたが、「新たに日本八景の選定作業を進めていく」。種田局長が遠回りしてきたのも「候補地の視察のため」だったというのだ。記者が質問すると、四国にも数カ所の候補地があり、面河溪もその中に入っているというのだ。面河溪が日本八景に選ばれるかもしれない。地元の人と、とくに交通運輸関係者や上浮穴郡の人たちは大喜びした。同時に大面河宣伝会なども組織され、面河宣伝ブームが沸き起った。

ここで注意しておきたいこと

がある。種田局長は土佐街道を通ってきたが、面河溪までは入らなかつた。徳島県では池田から交通不便な祖谷川に入っているし、高知県では高知から須崎まで足を延ばしている。これに対し、佐川く松山間は素通りに近い旅だった。また記者の質問も、かなり身びいきな受け答えだったことが想像できる。「四国にも数カ所あるんでしようね」「ウンウン」「じゃあ、面河溪も入つてますね」「うんうん、ヤムニヤ……」こんなやりとりだったのかも、しれないのだ。

真相はともかく、この記事は大いに好感を持って読まれたようだ。面河の名が天下に知られるようになれば観光地としてなによりも、まず道路が良くなる。これが地元が一番期待するところだった。大國鉄がバックにつけば、当時としては、これほど強い味方はなかつた。(昭和56年4月14日)



面河溪関門付近。古くは訪れる人もない仙遊境だった

海南新聞が紹介記事

「白雲のたなびく峯みねにきてみれば 伊予の高嶺たかねの麓ふもとなりけり」

松山藩の山林奉行、加藤勘介が面河山に仕事で入った時に詠んだ歌の一つであるという。松山市湊町円光寺の明月上人が残した文章の中の二節は、記録の中に登場する面河溪の最も古いものだとされている。二七八〇年代、今から二百数年前のことだった。

その後、明治に入り、地元新聞紙上に面河紹介の記事がポツリポツリと掲載されるようになった。中でも石丸富太郎さんは、投稿に熱心だった。石丸さんは明治十九年、温泉郡重信町の生まれ。明治三十六年、愛媛師範学校を卒業し、柚川村(現面河村)笠方尋常小学校の訓導兼校長として着任した。教育に打ち込むかわら、面河の素晴らしい景色を伝えようと考えた石丸さんは、当時の海南新聞に投稿した。また同紙の編集局田中蛙堂あひだうさんを何度も訪れ、面河溪の素晴らしさを語り、ぜひ面河へ来るようにと勧めた。

その結果、明治四十二年十月田中さんを中心に松山地方の詩人、画家、登山家、写真家など九人の「隊」が面河溪を探勝した。この時、「空船橋」「蓬萊溪」などの名がつけられた。また、「面河探勝の記」(五回連載)、版画(六回)、漢詩(五回)、「面河探勝句録」(四回)が次々と連載された。

これより少し前の明治三十五年、中川梅吉さん(明治十三年生まれ)が、関門より少し手前の若山というところに旅館を建てた。初めは行商人が泊まるだけの寂しいものだったが、新聞で面

河溪の名が知られ始めると、探勝客の数も少しずつ増えてきた。大正十五年五月には児童文学者の巖谷小波も宿泊した。小波は「中川紅緑館」の文字を大看板に墨跡黒々と書き残した。小波直筆の看板がある旅館ということで「紅緑館」はその後も多くの有名人を迎えた。

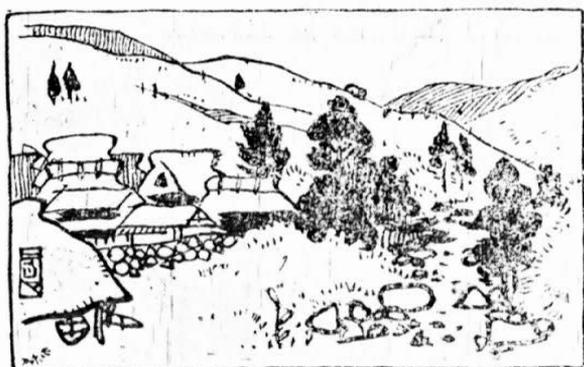
大正期の柚川村は、洪草を中心とした柚野地区と、面河川に沿って集落が点在する大味川地区の二つに分かれていた。物資の交流はほとんどが松山を相手にしたものであり、道路も黒森峠を越えてゆくコースが幹線だった。もちろん、急坂があるため、荷物は人が背負うか、馬に乗せるしかなかった。一方、面河川に沿って美川村御三戸に至るコースは、物資の運搬にはほとんど使われなかった。木材を運ぶときは、筏いかだを組み、川を下ればよかった。こんな状態だから、道は人が歩けるだけのうさぎ道だった。

久万―松山間に乗合自動車が始めたのが大正八年。松山―久万―御三戸……の土佐街道に自動車の姿が見えるようになる。面河探勝に行く人たちは、自動車を利用するようになった。御三戸からだ、黒森峠越えの三分の二くらいの距離を歩くだけでいい。しかも急坂がなかった。

多分このころだろう。中川梅吉さんは、駕籠かごを用意した。地元の屈強な人たちを「かき夫」として契約。客から連絡があれば自動車の終点まで行つて待ち、客を乗せて紅緑館へ運んでくる。帰りはこの逆。「かき夫」は、ふだん林業などの仕事をしていて、旅館から注文があれば出かけていった。梅吉さんの孫で、現面河村長、中川鬼子太郎

さん(五)によると「駕籠の数は、多いときには十挺とん以上もあったように思う。カゴの長い列を作つて探勝客がやつてくる光景を、子供のころよく見ました。もちろん、電気も電話もなく、連絡は手紙だったのでしょう。照明はランプで、私も火屋ひやをよく磨かされたものでした」。

面河溪は、岩から岩へ飛び移り、がけを登ったり降りたりしなければ関門から奥へはなかなか行けなかった。探勝客が増加し、少しずつ道が造られるようになった。「棧道」といって、急斜面に柵のように丸太を築いて造られたもので、道というよりも「足場」と言った方がピッタリしたものであった。棧道は所々に穴があいていた。足元によく注意し、バランスに気を使いながら、探勝客は夫婦岩へ、亀腹へと入つていった。(昭和56年4月15日)



明治42年ごろの洪草風景版画。佐賀徹也作

洪草の里

白銀の美しさを紹介

大正十三年二月の海南新聞に「雪の面河を憶^{おぼ}れて」という七回連続の記事がある。署名は「県立松山商業四年 中川武久生」となっている。中川武久さんは柚川村大味川の出身で、七十六歳。新聞記事を参考に、本格的な観光売り出しが始まる前の面河周辺をのぞいてみよう。

中川さんは明治三十八年二月三十日、柚川村若山で生まれた。小学校は若山尋常小学校。かやぶきの二十四坪(百十二平方^尺)に教室と職員室兼宿直室が二つずつ設けられていた。児童数は少ない時で六十人前後、多い時は九十人を超していた。最初は先生が一人で、六つの学年が二つの学級で勉強していた。明治四十二年から先生が二人になり、クラスも一から三学年と四から六学年の二クラスになった。

中川さんは松山商業へ進学しようと考えていた。だが、田舎の小学校だけでは学力の面で自信がない。そこで弘形村(現美川村)の弘形小高等科へ通うことにした。学校は上黒岩に近いところにあった。沢渡の知人の家に寄宿し、面河川を渡し船で渡り、学校へ通学したという。

松山商業に進学すると石鉄寮に入った。面河へ帰るのは冬、夏の長期休暇の時だけ。柚川村若山の実家を出発するのが午前六時ごろ。通仙橋から割石川に沿って右折。洪草、土泥、笠方を通り、黒森峠越えの坂道にかかった。洪草には大西清風楼、笠方には八幡さんが経営する旅館があり、茶店にもなっていた。旅人たちは駄菓子を買い求め、茶の接待を受け、疲れを癒やしていた。

黒森峠の急坂は約六^キ。面河側からの登りがとくに厳しかった。石がゴロゴロした道で、雪解け期や雨の後はよくぬかるんだ。荷物を積んだ駄馬が行き来するので、路面は一般の山道よりもずっと傷んでいた。

峠を越えて下つてゆくと、白猪の滝の下方に問屋という集落があり、さらに下ると金比羅神社がある。どちらにも茶店があり、駄菓子、わらじなどを売っている。この辺は、荷物の中継所にもなっていた。面河からは木炭などを積み、松山からも食料品などを積んだ駄馬がやつてくる。問屋や金比羅神社前の茶店で待ち合わせ、背中の荷物を交換すると、再び、もと来た道を帰っていった。

中川さんは、黒森峠で弁当を開くのが普通だった。松山平野と瀬戸内海が一望に見渡せた。峠まで来た後は楽だった。坂をどんどん下り、川内の扇状地を横切る。重信川の長い木造の橋を渡れば横河原。汽車賃は二十銭。あとは座っているだけで松山に到着する。松山へは、午後四時ごろ着いていたという。山で育った青年ならではの健脚ぶりだ。

中川さんは、松山商業四年の冬休みに、面河溪探勝を思い立った。夏の面河は紹介されているが、雪に閉ざされた面河は、まだ、ほとんど知られていなかった。河之内の金毘羅さんまでは学生服に革靴の学生スタイル。神社前の茶店でわらじを買った。靴を脱ぎ、使い古しの足袋を履き、わらじを結んだ。雪の中の歩行は、これがいちばん楽なのだ。足袋がぬれ、足がコチコチに冷たくなるが、そんなことは問題でなかった。連載記事の中での中



昭和6年には、植物学者の牧野富太郎と八木繁一も面河溪を訪れている

川さんは、面河の出身ではなく、遠来の旅人といった想定で書かれている。まず、若山の昇仙橋のたもとにある押岡旅館で泊、翌朝、旅館の犬「エス」を連れて面河溪に入った。

溪谷の中は想像以上の美しさだった。シンと静まった白銀の世界は「幾千町歩の樹立、これただ水晶のごとく、いと花やかなるに、青ハトの起つて、飛んで、また還る。実に清浄無垢なるは雪の面河なるべし」。雪で埋もれた谷筋には、猟師の足跡が転々と続いていたという。

(昭和56年4月17日)

「八景」より交通の便を

面河宣伝運動は日増しに活発になった。折から大阪のある新聞が新日本八景の紙上コンクールを行うことになった。各地からはがきで応募させ、投票数の多いものを新日本八景に選ぶというもの。大面河宣伝会は、商業会議所などと共同して面河入選期成同盟会を作った。多数の人に投票を呼びかけ、物量作戦で面河を新日本八景に当選させようというのだ。そのためには会長に現知事の香坂昌康氏を据えるのが得策だ。さうそく上京中の香坂知事に就任要請の電報を打った。返事はOKだった。ところが、これが大問題となった。

明治四十二年の内務省令二〇号では「人気投票、富クジ、その他射幸心を扇動し、公安を害するの行為はこれを禁止す」となっていた。これに基づき、愛媛県でも同様の県令を制定した。それも香坂知事になってからのことだった。

「自ら県令を出し弾圧を加えておきながら、それに違反するような団体の長に就任するとは何ごとだ」地元新聞はこぞって非難した。市民も、知事の軽率な行動については批判的で「新日本八景を投票で選定するという方法は公平でない。他にもっといい方法があるはずだ。たとえ当選しなかったとしても、面河が天下の絶景であることに変わりはない」(愛媛銀行、村上平太郎頭取)。「面河の宣伝をすることは大切だが、それ以上に、多くの人が面河へ行けるようになることが必要だ。面河の名を知っている、実際に行った人は少ない。交通を便利にし、遊園地としての設備くら

いはして置く必要がある」(愛媛自動車、石原信順社長)と強い口調で語っていた。

香坂知事が気軽に会長の役を引き受けたのは裏があった。昭和二年四月十七日、憲政会の若槻札次郎内閣が総辞職し、同二十日、政友会の田中義一内閣が誕生した。このころの知事は「官選」といい、中央からの人事で動いていた。内閣の交代は知事の交代にもつながった。政党色のない知事でも、失政があったり、地元の人気がなければ簡単に更迭されていた。香坂知事の東京の理由は、休業中の今治商業銀行に援助を求めるためだった。一説では、今商の用件はあくまでも表面き。実は新しく政権を取った政友会の鳩山内閣書記官長(現内閣官房長官)に引き続き愛媛県知事の地位に置いてくれるよう、延命工作に行っていたともいわれている。ともかく多忙だった。その最中に会長就任要請の電報が届けられた。「どうせよくある会長依頼だろう」と、中身をよく確かめもせず承諾してしまったのだ。もちろん、面河へは行ったことがなかった。

香坂知事は政党色を表面に出さない人だった。それでも彼が愛媛県知事に就任する際、憲政会系の伊沢多喜男氏に世話になったことから、憲政会系だといわれていた。だが、就任後も政党色を極力避けたため、憲政会からも政友会からも嫌われた。逆に一般民衆には好意を持たれた。「君子危うきに近寄らず」式の消極的な行政で、とくに失政といわれるようなこともなかった。

東京で延命工作があったのかどうか、とにかく香坂知事の命運はいい方向に進んでいたという。五月十二日には政友会の南予の大物、山村豊次

郎さんがわざわざ県庁へ出向き、「栄転」の報を伝えたというウワサも流れた。これに対し「知事が内務省令に違反している」と内状を知らせる電報が内務省に殺到したため、「内務省が実情調査に来るらしい」とのうわさもあった。

非難の声はマスコミを中心に次第に高まっていた。そんな中、「面河溪入選期成同盟会 会長 香坂昌康」の名前が入った投票を依頼する手紙が、県下各所に送られているのが分かった。一時は自らの非を認めていた知事が、依然として会長の座についている。「売節の奴隷……その名は香坂昌康 昨日は憲政会に今日は政友会にとこびをひさぐ娼婦のごとく 手練手管の首つなぎ運動」(五月十七日付愛媛新報)と、地元各新聞は筆の限りを尽くして知事を糾弾した。やがて十七日、臨時閣議が開かれ、地方長官の異動が発表された。三十四府県の知事が動き、話題の香坂知事は休職に、後任には元青森県知事で休職中だった尾崎勇次郎氏が就任することになった。

(昭和56年4月18日)



明治42年の面河溪ひと本嶽。このとき森田雷死久が「仙頭巖」と名付けた。佐賀徹也作

知事の現地視察実現

香坂知事が休職となり、面河溪を新日本八景に当選させる運動も休止してしまった。だが、香坂知事の内務省令違反事件は、面河溪を有名にってしまった。「面河の名を有名にするだけでなく、道路を整備し、できるだけ多くの人が面河へ行くようにすればいい」という考え方も次第に県民の間に浸透していった。久万町や柚川村（現面河村）の関係者も同様で、道路の改修は面河へ来る人のためだけでなく、地元民にとっても待ち望まれることだった。

地元町村長らは何度も話し合いを進め、昭和二年十二月、とうとう尾崎勇次郎知事を引っぱり出すのに成功した。知事の日程はわずかに泊二日だったが、地元民らは大いに期待した。当時の道路事情がいかに悪かったか、知事の面河行きを例に紹介しよう。

十一月十四日午前六時、県庁前に新聞記者五人が顔をそろえた。大阪毎日の村田、大阪朝日の杉島、伊予新報の石井、海南新聞の渡部、愛媛新報の白石という顔ぶれ。尾崎知事は来年度予算の査定も終わり、多少の暇ができた。上浮穴郡選出の県議らがあまりうるさく「面河を見に来てほしい」というものだから、ハイキングがてらの面河行きだった。知事の一行は十三日に久万に入り、谷亀旅館で二泊していた。新聞記者は自動車で松山を出発、午前八時に久万町で知事と合流することになっていた。

知事の一行は、太田蚕糸課長、篠原技師、藤崎久万署長、児玉主事、大野助直県議（小田出身）、

近藤金四郎県議（温泉郡三内村出身）の七人だった。記者五人と合わせ総勢十二人は自動車二台に分乗、午前八時すぎ久万町を出発、土佐街道を南へと向かった。仕七川村（現美川村）に入ると、久万川の青い流れと紅葉しはじめた山々の景色が飛び込んでくる。御三戸の絶景を右に見ながら左折すると、やがて仕七川小学校に到着した。児童たちが校庭に整列し、かわいい声で知事を歓迎した。

当時、自動車が通れた道は松山からの土佐街道（現国道33号）、御三戸〜古味間、それに久万から岩屋寺へ至る道が二カ月前に開通したばかりだった。仕七川小学校を出るとすぐ古味のバス停。自動車道は終点になり、あとは徒歩だけになる。

「わらじの方が足が疲れないよ」「いや、履き慣れた靴の方が楽だ」。新聞記者たちは、いろいろ思案しながら足元を固め出発した。尾崎知事一人が駕籠に乗る。記者たちがカメラを向けると「僕が駕籠に乗っている写真を撮るのなら、君たちが疲れきった顔も出さなくては片手落ちだよ」と予防線を張った。

地元の人にも加わり、隊列は三十人以上に膨れ上がった。まだ疲れもなく、全員が元気そのもの。大野県議を先頭に面河へ向かった。仕七川村の御滝で二休み。知事はここで駕籠を降り徒歩に切り替えた。やがて村境。柚川村に入った。村会議員を先頭に、村内有志、小学校児童全員が整列してくれた。家々の軒先には国旗が飾られている。知事が来れば道が良くなる……素朴な村の人たちの歓迎ぶりは、藩政時代にお殿様を迎えた時を思わせるほど激しかった。

柚川村に入ってから、八幡神社で昼食。正午に出発し、河合の茶店に午後二時到着。関門まで十二キロあるという。知事の足も、このあたりまで来るとフラフラし始めた。途中に面河尋常小学校の前を通った。かやぶきの校舎で、児童数六十〜七十人。先生は夫婦の男女教員二人だけ。三つの学年を二学級にして複々式の授業を行っていた。柚川村にはこのような小学校が六校もあった。村が広く、集落があちらこちらに分散しているためだ。それでも通学距離が遠すぎて、隣の川瀬村に委託している地区もある。高等小学校は洪草に二つあるだけで、男子児童の多くは、村が建てた無料の寄宿舎に入り自炊。女子は入寮できず、自然と尋常小学校六年だけで学校を済ませる者が多かったという。（昭和56年4月19日）



駕籠で面河へ向かう尾崎勇次郎知事 昭和2年11月14日

わらじ履きで関門へ

紅緑館はもとの中川旅館で、中川梅吉さんが明治三十五年から経営していた。三階建ての立派な建物で、入り口には児童文学者、巖谷小波が筆をとって書いた「中川紅緑館」の大看板が掲げられていた。

『上浮穴郡に光をかかげた人々』によると、紅緑館の名は巖谷小波によって命名されたことになっている。小波が中川旅館を訪れたのは大正十五年五月。

ところが、大正十三年一月十八日付海南新聞「雪の面河を憧^{あか}れて」の文中には、「三層の堂々たる旅館紅緑館……」と紅緑館の文字が見える。看板そのものは小波によって書かれたにしろ、紅緑館という名はすでに使われていたようである。当時の面河周辺には、紅緑館のほか、押岡旅館、亀腹旅館などがあつたという。

昭和五年六月、紅緑館に宿泊した歌人、吉井勇は、小波直筆の看板の裏側へ「面河なる五色河原の朝霧に 我れたちぬれてものをこそ思ふ」と一首したためた。看板の名はいつそう有名になった。紅緑館は昭和二十五年、関門に移ったが、三十五年に火事で全焼、看板はもちろん、名士が残した書や画も灰になってしまった。

尾崎知事が宿泊した時の紅緑館は、巖谷小波が泊まった二年半後。看板の表面は新しく、裏には吉井勇の歌も書かれていなかったはずである。

午後三時、紅緑館に到着した二行は、ちょうちんを手に関門へ向かった。関門から先はしごを上る。栈道といって丸太を組み合わせた足場を

たどつての探勝行だった。わらじ履きの軽装でなければ、とても行けない難所だった。愛媛新報の白石記者は長旅でクタクタになっていた。亀腹まで行つてみたいが、とても自信がない。関門までは歩けないというのもシヤクだ。

そこで、旅館の大夫が「関門から奥はげたでは無理」といつていたのを思い出し、わざとげた履きで行くことにした。関門までの風景は「巨岩奇岩怪を争い、奇を競い、その間に翠松紅葉纏綿して、正に天下の絶景たるに恥じないものであり、自ら賛嘆の声を漏らさずにはいられなかった」。

大夫が言つたとおり、「それから奥はげたでは無理だったので、一行に別れを告げてただ一人、元来た道を引き返し、心ゆくまで四方の風景を賞しつつ旅館へ帰つた」(愛媛新報)。やがてちょうちんに火をつけた一行が三々五々帰つてきた。

尾崎知事自身は物見遊山のつもりでも、地元の人たちからすれば、知事は道を造つてくれる神様のように映つたことだろう。自らこのような山奥まで出向くとは、大変なことだった。やがて紋つき羽織にげた、はかまに地下足袋、あるいは洋服にわらじといったスタイルの地元有志らが、旅館に多数詰めかけた。

「同席を改めると、知事に陪食の栄を得んと詰めかけた有志連を合わせ四十名に近い大座。杉島君(大阪朝日記者)や石井君(伊予新報記者)が面河溪の明美な風光は首肯するが、再び来るころではないと疲労を訴えと、知事は「ナ、この次に君たちが来る時には、この若山まで自動車だ」と近く、否、すでに明年度の予算に県

道新設工事費を計上しているらしい口ぶりを漏らすので、並みいる地方人は随喜渴仰の涙を流し、大野県議の鼻はいやが上にも高い」(愛媛新報)。

食事の後は、地元青年たちによって面河万歳が上演された。知事の二行を何とかして歓待しようとして、役場職員が山の中を必死になって回り、万歳ができる若者たちを駆り集めてきたということだった。(昭和56年4月20日)



明治42年の面河・関門。
左手前にはしごがかけられている
佐賀徹也作

思惑秘めて黒森越え

上浮穴郡柚川村(現面河村)若山の紅緑館と中川旅館で迎えた朝は、ずいぶん気持ちよかった。清らかな流れが軽く音をたて、立ち込めた霧の中に、山々が黒く浮き島のように点在していた。早起きの尾崎知事は、さっそく筆を取り上げた。

「面河の晩秋」

もみぢぬる 面河の谷を たづぬれば

川の面には 錦しきつる

「探勝の途上」

常盤木に そいて生いぬる 紅葉ばの

紅きは里の 心なるらん

この日は午前七時半に出発し、前日来たコースを引き返し、古味から自転車で松山へ帰る予定だった。

ところが出発前になって騒ぎが起こった。同行していた近藤金四郎県議が、どうしても黒森峠越えのコースで帰ってほしいと言いつ出したのだ。「おかしいと思つたら、やっぱり魂胆があつたのか。近藤県議は三内村(現川内町)の出身。面河まで来たのを利用し、知事に地元を歩いてもらい、道路工事の陳情をする気だな——記者連中には、職業柄すぐ分かつた。だが、感心してはおられなかつた。聞くところによると、前日歩いた仕七川までのコースが二十キロ。黒森峠の道は二・五倍の約三十キロで、かなり急坂だという。

知事はこの日午後六時から、松山市内の料亭で県参事会員たちと会食することになっていた。「遠回りする余裕がない」と答えると、近藤県議

は「道が長くなつても、自動車上の時間が短縮されるから、十分間に合います」という。とにかく知事から離れず、どうしてもと懇願してきかない。とうとう知事も折れ、黒森峠越えが決まった。

「知事は駕籠だからいいけど、こちらはただ足の裏のまめを増やすだけ」と記者連中も半ばやけ気味で旅館を出発した。

黒森峠へ行くには、面河川に沿って河口まで下り、ここから右折する。洪草、笠方を通過し、急坂を登り上りつめると上浮穴と温泉の郡境「黒森峠」だ。杉島記者(大阪朝日)と白石記者(愛媛新報)の二人が先頭に立った。ペースを落とし、その代わりに休むことなく、ノロノロと歩き始めた。

途中で村の人に「お茶屋までどのくらい？」と聞くと「すぐそこです」という。ところが、いくら歩いてもお茶屋が見えてこない。山の人の「すぐそこ」は、町の人間には「はるか向こう」なのだ。河口を過ぎ、午前十時半洪草に到着した。少し早いここで昼食となった。白石記者が足袋を脱いで足の裏を見ると、左右合わせてまめの数は十二、三。小指のつめは紫色になっていた。見るに堪えな藤崎署長が、馬を二頭用意してきた。柚川村では自転車が使えるような道はほとんどない。駐在所の警察官も、ここでは騎馬警官のように馬に乗って村内を巡視していたのだ。

一方、昼食の場となった旅館では、紋付き羽織の村会議員が、尾崎知事に盛んに陳情していた。「ああ、さようか。なんとか善処してみよう」尾崎知事が答えると、村会議員たちは、まるで道が完成したかのような表情を見せていた。

陳情も終わり、ちょうど正午に出発すること

になった。まめの数が多い杉島記者と白石記者は、駐在所の馬に交代で乗ってゆくことにした。笠方の手前では、ハッとするような美しい乙女とすれ違った。足が痛むはずの杉島記者も、痛さを忘れて「珍しいシャツだね」と騒ぐほど。

やがて石ころの多い坂道に変わった。汗をかきかき黒森峠にたどりつくと、三内村の青年団員や処女会員(女子青年団員)が休憩所を設け、待ち受けていた。「なるほど、近藤県議が必死になつて知事を引っぱつたはずだ。筋書きはできていたのだ」一同、冷たいビールにノドを潤した。説明役が大野県議から近藤県議に代わる。近藤県議の声が一段と弾んだ。

知事一行は柚川村の人たちから三内村の人たちに移された。万歳を三唱。あとは下り坂ばかりの八キロ弱だ。どんどん下り、河之内の金毘羅寺前に到着したのが、午後五時三十分だった。県庁の迎えの自動車四台が、ちゃんと待ち構えていた。もう歩く必要はなかった。

(昭和56年4月21日)



昭和初期の面河溪電腹

若山では溪谷背に3旅館建つ

昭和初期、面河村の宿泊設備はどのようなものだったのか。また、面河溪が有名になり、探勝客が多くなるにつれ、どのように変化していったのだろうか。今少し詳しく振り返ってみよう。

当時の唯一の幹線道、黒森峠道を下つてくると笠方の集落に到着する。ここには八幡旅館があった。松山商業生だった中川武久さん(七)は川村出身は、夏冬の休みで往復する時、よくこの旅館に立ち寄った。

菓子を二、三銭買い求め、縁台に腰を下ろすと、店の人がお茶をサービスしてくれた。武久さんは一人娘のはるえさんと同じくらいな年齢好。はるえさんはその後婿を取り、家業を続けた。今、八幡旅館は面河ダムの完成で湖底に沈んでしまい、はるえさん夫婦もすでに亡くなったという。

笠方から割石川沿いに下ると、洪草の集落に出る。道幅が急に広くなった右側に酒屋(現在の久万農協面河支所のところ)があり、続いて総二階の松本旅館があった。美人の奥さんで有名だった松本操代子さんの家である。もともと本格的な旅館ではなく、家が広がったので、旅館として片手間に営業していた。宿泊客は土木作業員らが主で、久万から集金に来た銀行員もよく利用していたという。

操代子さんの夫、延年さんは温泉郡荏原村(現松山市)の出。縁があつて婿入りした。松本旅館は火災で焼け、操代子さんも病気で亡くなった。現在は延年さん(八)がたばこ屋を営んでいる。

松本旅館の後を数軒先へ行くと三階建ての日

之出屋があるが、昭和初期は二階建てだった。道を挟んで斜め前にある大西旅館は、かつて大西清

嵐楼と叫んだ。道から見ると二階建てだが、割石川に面したところは三階建て。川と道に挟まれた細長い三層楼は、古き時代の旅人の心を和ませたに違いない。大西清嵐楼も火災に遭い、現在の三階建ては建て替えたものだという。大西清嵐楼の前で道は左に折れ、川川橋を渡る。

洪草から通仙橋に出、面河川に沿って左へ行くと、面河溪関門の少し手前に若山の集落がある。ここは面河溪探勝のベースキャンプとして、また、高知県側から山を越えてやつてくる石鎚参拝客の宿としてにぎわった。

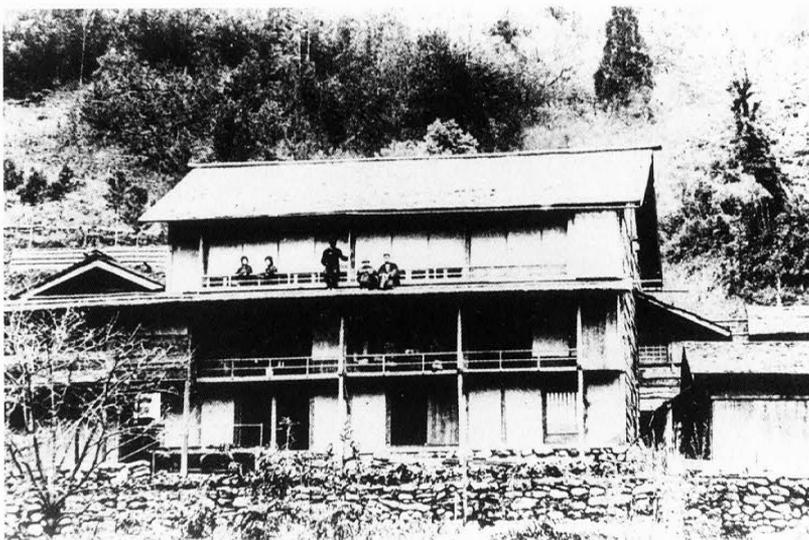
若山にも三軒の旅館があった。溪谷沿いの道路も、少し前までは車一台がやっと通れる程度の狭い道で、両側に家並みがあり、旅館は三軒とも溪谷を背にして建っていた。中ヶ市橋(かつての昇仙橋のことか?)のすぐ上手が押岡旅館。続いて中川紅緑館、菊水旅館と少しずつ離れて建っていた。

押岡旅館の押岡さんは高知県の人。出身地の関係から、石鎚参拝客がよく泊まった。また、国有林の作業をする高知の大林区署(現管林局)の作業員もよく利用した。国有地の一角、面河溪の亀腹の正面に、押岡さんは旅館を建てた。亀腹旅館、今の溪泉亭である。押岡さんが建てたのが大正の中ごろ。やがて、経営者は中川梅吉さん、重見丈太郎さんと代わり、重見さんの代で溪泉亭と命名。昭和十八年に伊予鉄の経営となった。

中川紅緑館は前にも触れたように中川梅吉さんの経営。菊水旅館も三階建てで、旅館業は終戦後まで続いていた。建物は最近まであったが、現

在は民宿となっている。

面河溪は昭和八年に国指定名勝地となった。これに合わせて同九年、川川村を面河村と改名した。同十二年には、御三戸からの自動車道が若山まで開通した。これにより村内の幹線は黒森峠コースから若山―久万コースの方に移りはじめた。同三十年、石鎚国定公園が指定され、同四十五年には石鎚スカイラインが開通したところ、面河溪も遊歩道や自動車道 諸施設が整備され、ほぼ今日の形になった。(昭和56年4月22日)



若山にあった中川紅緑館

お蚕さん——面河にも天然冷蔵庫

上浮穴郡袖川村(現面河村)にも、大成の風穴と呼ばれる冷たい風が出てくる穴があった。川之石町(現保内町)の日進館が日土村(現八幡浜市)で風穴を利用したように、ここでも蚕種の貯蔵が一年中行われた。この風穴については、管理をしてきた中川相次郎さんの子供、長岡悟さん(松山市南高井町)が、昭和二年の「大成風穴冷蔵蚕種受込帳」を保存していた。蚕種の種紙(蚕種台紙)を二つ折りにした廃物利用で、毎日の出入り数値、金額、業者名、輸送方法などを詳細に書き残したものの、貴重な記録を中心に、面河周辺のお蚕景をたどってみよう。

大成地区は、面河村洪草から約三キロ東の北西斜面中腹にある。標高約八百メートル。集落から北東に約一・五キロ、斜面を登ったところに風穴があった。標高千五百メートル。長岡悟さんの話では「穴の奥に深いき間のようなものがあるらしく、冷たい空気が吹き出していた。地中で対流現象があり、温かい空気と冷たい空気が分かれ、風穴へは冷たい空気だけが出ているのだろう。近くには温風穴という温かい空気が出る穴もあった」という。夏でも、風穴の中の石を持ち上げると、下の地面が凍っていたという。天然の冷蔵庫だ。

中川相次郎さんは、大成地区にあった小学校の校長だった。大成の風穴に蚕種貯蔵庫ができたのは明治三十年。風穴が中川さんの土地にあったこともあり、管理を引き受けるようになった。なぜ蚕種貯蔵を思いついたかは、今ひとつ分からない。ただ、川之石の日進館が風穴を利用しはじめ

たのと同時期であることから、長野方面の蚕種冷蔵技術が伝わってきたためではないかとも思われる。

風穴の中は二辺約八メートルの正方形。入り口には、厚い木で、表面にトタンを張った囲いがあつた。戸を開けると通路は迷路のように右へ左へと曲がり、途中に数カ所ドアがあつた。冷気を逃さないためである。

昭和二年二月十日に七業者から約八千枚の蚕種紙が持ち込まれた。最も少ないのが中村理七郎さんの百三十五枚。愛国館で四千四百二十六枚。他に菊池館、高橋幸衛門、古谷金一、久万蚕種(株)、東雲館といった蚕種業者の名が見える。

風穴に貯蔵された蚕種は、春の掃き立てが始まる少し前の四月中旬から少しずつ運び出された。四月十三、十六日に久万蚕種が十三枚と五枚。十七日には愛国館が七枚。続いて十八日菊池館十五枚。十九日久万蚕種四枚。二十日は中村理七郎さんが預けた分を喜多郡新谷町、泉重行さんへ十四枚という具合。本人が取りに来ることもあれば仲次人が来ることもあつた。「特夫」とあるのは、特別に人夫を雇い、急送してもらったのだろうか。

蚕種運びは慌ただしかった。風穴から出し、常温に触れた蚕種は活動を始める。約二週間で蚕児が発生するが、その間に蚕種産業者を經由して養蚕家へ渡さねばならない。

風穴は久万からでも二日かかった。蚕種業者らは洪草に入ると大西清嵐楼、日之出屋旅館、松本旅館で二泊。翌日大成へ上がり、その日のうちに久万まで運ぶのだった。蚕業者が来る時期は、洪

草がにぎわう時でもあつた。

大成の中川さんの家の軒には、大きな白旗があつた。業者が来ると、勝手に白旗を立てる。白旗が見えると客が来たという合図だ。中川さんは授業を中断して自宅へ帰り、業者を風穴へ案内した。中川さんが留守をしても、畑に出ている家の人の誰かが旗を見つけては業者を案内していたという。

(昭和57年5月27日)



風穴での蚕種冷蔵を細かくつづった「蚕種受込帳」